

白糠のアイヌ語地名

第1回

白糠町には古くからアイヌの人たちが住み、豊かな自然やその恵みとともに独自の文化を育んできました。その中で最も身近なものが、普段私たちが使っている地名です。本町の名前である「白糠」をはじめ、町内にある地名の多くはアイヌ語に由来しています。そこで、本町のアイヌ語地名について、白糠地名研究会が刊行した『白糠のアイヌ語地名』をもとに、地名の由来とその場所につづる話を「海岸筋」「茶路川筋」「庶路川筋」「和天別川筋」の4つに分け、今月から順に紹介します。

白糠地名研究会がまとめた『白糠のアイヌ語地名（1985年発行）』で、故坂本正能会長は、次のように述べています。

「アイヌ民族は文字をもたなかったが、その鋭敏な感覚と優れた記憶力により、地形・山・河川・湖沼・産物・生活環境、自然の風物等を的確に地名にあらわした。アイヌ語地名を聞くだけで、居ながらにしてその地形なり産物なりを眼にうかべることができる」

このように、アイヌ語地名は、ふるさと白糠の今と昔をつなぎ、

土地の成り立ちやその場所のようす、人々との関わりを明らかにしています。

■海岸筋のアイヌ語地名（1）

○白糠（しらぬか）

「白糠」は、「シラリ（磯）・カ（上・越える）」に由来し、波が磯を越えてしぶきがたつ「岩磯のほとり」を意味します。

オクネップ川から白糠漁港をはさみ、シラリカップ川までの岩磯のようすからこの名がついたと言

この話に出てくるトドのかたちをした大岩には深い意味があります。

トドは、アイヌ民族にとって貴重な食糧であり、その脂と皮は大切な生活必需品でした。アイヌの人たちは、トドがとれるように、岩の上にヌサ（御幣）を立ててカムイノミ（神々への祈り）をしたということです。

②カムイ・トツカリ岩（神のアザラシ）の伝説

石炭岬の東の谷間の奥から清流のシラリカップ川が真っ直ぐに海に出て、平磯の上を走って突き当たるところに、陸に向かってちょうどトツカリ（アザラシ）が頭を上げて、腹ばいになったように見える岩があった。

潮が引いて、日に照らされるときは、黒く光って見えた。この岩は昔から、サマイクル（人々に生活の知恵を授ける神）がアイヌに幸不幸を知らせるために遣わされた使いのカムイ（神）がなったと言われている。

引き潮にこの岩がはつきり見える間は、魚や昆布がたくさんとれて食べ物に不自由はなかったが、砂に埋まって見えなくなった場合には、不漁で苦しめられた。この



▲白糠港の東側に見える岩礁。昔は岩礁の上で休むトツカリの姿を見ることができました。

われています。

○オクネップ（川）

「オクネップ」は、東茶路から



▲白糠港の西側から太平洋に流れ出ているオクネップ川。

時には、村の長はカムイノミをしたものだ。

（千葉ヌイフチの話）
「市立釧路図書館報『読書人』掲載「釧路地方の伝説」（佐藤直太郎）から引用」

■海岸筋のアイヌ語地名とそこにまつわる話題

①白糠

関連地名／オクネップ（川）、シラリカップ（川）／地名にまつわる伝説

②パシクル（沼）／パシクル伝説

③オシヨロコツ／義経伝説

④和天別（川）／和天別川河口遺跡のこと

⑤茶路（川）／茶路川の奇談

⑥シリエド

関連地名／石炭岬

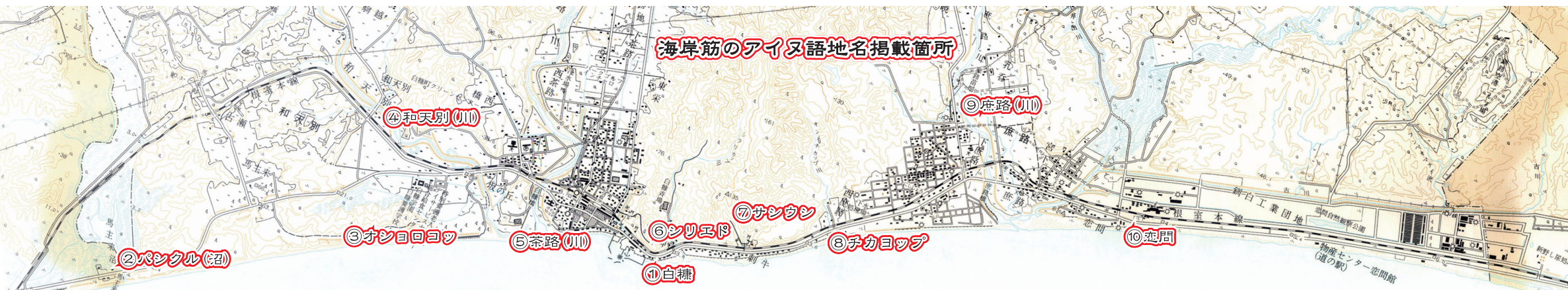
⑦サシウシ／サシウシチャシコツと伝説

⑧チカヨツプ（オネネチカオプ川）／網走へ通じる道

⑨庶路（川）／庶路川にまつわる伝説

⑩恋問／コイトイ沼の伝説

右記『海岸筋のアイヌ語地名』10カ所を、今月から順に紹介します。また、場所については、下記図面を参照してください。



白糠市街地の東側をとり、厳島神社の下で白糠漁港へ流れ込む川の名前です。

よく流木がひっかかってつまつたことから、「オク（ひっかっている）・ネツ（流木）・プ（ところ）」と名づけられました。

○シラリカップ（川）

石炭岬の奥の山中から岬3丁目をぬけて「白糠」の由来となっている磯に注ぐ川の名前です。その川口が「シラリ（磯）・カ（上・越える）・プ（ところ）」

◆地名にまつわる伝説2題

①トドのかたちをした大岩の伝説
オクネップ川の川口に、トドのかたちをした大岩があった。潮が満ちてくると、潮は波しぶきをあげながらその岩をまたいだ。

シララは岩磯、オイカはまたぐ。潮がシララをオイカしたのである。シララオイカがシラライカに転じ、それが岩磯にあふれるという意味のシラリカとなった。それがいつしか和人の耳にシラヌカときこえ、白糠という漢字があられた。



▲白糠斎場の近くから撮影したシラリカップ川。

（貫塩喜蔵工カシの話）

白糠の アイヌ語地名

第2回

○パシクル（馬主来）

「パシクル」は、アイヌ語で「カラス」を意味し、釧路市音別町との境界にあるパシクル沼やこの沼に流れ込むパシクル川、また、馬主来町内会の名称として使われています。

アイヌ語辞典では「パシクル」は「カラス」とのみ記されていますが、貫塩喜蔵工カシは、地名の由来として、アイヌ語の分析と伝説をもとに、原型は「パ（見つける）・シリ（陸地）・クル（影）」で、それがつまって「パシクル」になったと説いています。

◆地名にまつわる伝説など

①パシクル沼の伝説

昔、西の方から、一人の青年が小舟にカキの稚貝を積んで、どこか繁殖させる所がないかとやってきた。



釧路市音別町側からパシクル沼を望む

そのとき、一面にガス（霧）がかかり、一寸先も見えなくなってしまうが、カラスの鳴き声に導かれて舟を寄せていくと、やがて陸の影を見つけることができた。青年は、思わず「パ・シリ・クル！」と叫んだ。青年が陸へ上がってみると、そ

こには沼があり、たくさんのカラスが目に入った。

（貫塩喜蔵工カシの話）

また、パシクルには、もう一つカラスが重要な役割を果たした伝説があります。

国の重要無形民俗文化財となっているアイヌ古式舞踊の「フンペリムセ（鯨の踊り）」発祥の物語です。

②フンペリムセ発祥の由来

アイヌウタリは、太古から天の恵みによって食べ生きぬいてきた時として、天と自然の恵みが少ないときもあった。

あるとき、西方でカラスの鳴き声が激しいので行くと、パシクルトウ（沼）の浜辺に大きなフンペ（鯨）が波に寄せられていた。

シラヌカコタンのウタリは、このクジラを天恵の食料として感謝していただいた。その場で即興的にリムセ（踊り）が舞われた。

それが今に伝承されている。

（発祥の地碑文より）

■パシクル沼のカキ貝

「パシクル沼」の伝説にも出てきたように、パシクル沼とカキ貝



鯨をかたどった『フンペリムセ発祥の地碑』

には深い関係があります。今でも沼の岸にカキの貝殻が積み重なっている場所があるのとおり、大昔のパシクル沼はカキ貝の一大生息地でした。

平成23年8月、茨城大学などの研究機関によって行われた調査では、分厚く積み重なったカキ層が明らかにありました。

このカキ層は、約6千年前の縄文時代前期につくられたもので、当時は、気温と水温が今よりも高く、それにもなつて海水面上昇（縄文海進と呼ばれている）したことから、暖流系のカキ貝が北海道沿岸に北上し生息したと考えられています。

白糠の アイヌ語地名

第3回

○オシヨロコツ

パシクル沼から東へ、象の鼻と呼ばれる所まで続く丘陵は、海に面して崖が続いています。その途中にある崖がくぼんだ場所が「オシヨロコツ」です。

「オシヨロコツ」は、アイヌ語の「オソル（尻）・コツ（くぼみ、跡）」から、「人が尻もちをついてできたくぼみ」と解釈されていて、源義経が尻もちをついてできたという「義経伝説」に由来しています。

しかし、古い文献（「東游奇勝」1799年（寛政11））には、その場所に滝があると記されていることから、正しくは「オ（川尻）・ソ（滝）・オロ（向かって）・コツ（くぼみ）」で「滝つぼ」という意味のようです。

◆地名にまつわる伝説

・オシヨロコツの義経伝説

義経と弁慶がクスリ（釧路）からシラリカに向けて矢を射った。弁慶の矢はオタノシケの浜に落ちたが、義経の矢はシラリカのオシヨロコツの山にあたって松の木になった。

そして、シラリカまで来たところ、チャロ川の浜に鯨が寄っていたので、その肉を切り取り串に刺して焼いた。ところが、串のものが焼けて肉が火の中に落ちてボツと炎が大きく燃えたので、義経は驚いてとびあがり、尻もちをついた。そして尻の跡が残った。それでこれをオシヨロコツという。
そのときの松の木は枯れて、根っこからまた新しい木が生えている。

（四宅八重子フチの話）



崖がくぼんでいるオシヨロコツ

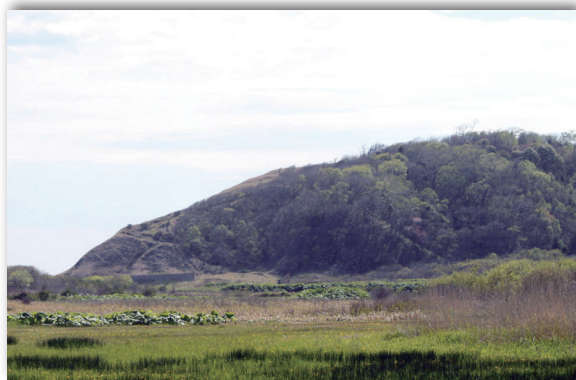
この伝説に出てくる鯨については次のような話もあります

弁慶との弓くらべに勝った義経が「どうだ、おれの弓の勢いはたいたものだろう」と自慢すると、沖の方から「そんなに威張るな」という声が聞こえたので、ひよいと見ると、波間から鯨が頭を出して笑っていた。

義経は大いに怒って、すぐさま射殺して引き上げ、しりから串を差し込んで土に突き刺し、火をたいて焼いた…。

（矢石フチの話）

〔市立釧路図書館報『読書人』掲載「釧路地方の伝説」（佐藤直太郎）から引用〕



象の鼻で知られているイワエド

○イワエド

オシヨロコツがある崖の一番東側は「象の鼻」と呼ばれる所です。その場所をアイヌ語で「イワエド」と言います。

「イワエド」とは、「イワ（岩山）・エド（突端）」で、岩山が象の鼻のように海に突き出ている様子から名付けられました。

このような「義経伝説」は全道各地にあり、アイヌ語地名などの由来になっていますが、研究者によると、この伝説は、和人がアイヌ神話に義経・弁慶を結びつけ、アイヌ伝説をつくりかえたり、創作したもので、江戸時代に広められたと言われています。

白糠の アイヌ語地名

第4回

○和天別（川）

「和天別」は、アイヌ語の「ワツテ（多くある）・ペツ（川）」に由来し、和天別川をさかのぼると支流が多くあることから、その名がついたと言われています。

北海道の名付け親で、幕末から明治初期に活躍した探検家の松浦武四郎は、『東蝦夷日誌』の中で「ワツテ」として次のように記しています。

「ワツテとは五本の指を開きし形と云。此川五六町上にてモトケフ（北より一番）、ヨサウシ（北より二ばん）、ユウル（北より三番）、ルベシナイ（北より四ばん）、サケフロ（北より五ばん）、…」。

しかし、アイヌ語地名研究の第一人者である山田秀三は『永田地名解』や知里真志保博士の解説を引用しながら、「旧記（『東蝦夷日誌』）の五指云々は、言葉の意味というより、その地形説明なのであった」と述べています。

では、松浦武四郎の日誌にある五つの川は何を指すのか。このことは、白糠地名研究会も明らかにしていません。

【参考文献】○新版『東蝦夷日誌』

（上）「東蝦夷日誌」著／松浦武四郎、編／吉田常吉、時事通信社、1962年○『北海道の地名』著／山田秀三、北海道新聞社、1984年



国道38号の下を流れる和天別川

◆和天別河口遺跡

和天別川の河口近くには「和天別河口遺跡」があります。今から1200年前から600年前までの擦文時代の遺跡と考えられています。

1965年（昭和40年）から68年（昭和43年）まで行われた調査では、35力所の竪穴住居跡が見つかり、そのうち30力所が発掘されました。住居は、一時期に35戸があったのではなく、改築や新築が行われたことで、35力所になったようで、集落は7〜8戸の規模だったと推定されています。

そして、これらの住居には、この時代の特徴である『かまど』が作られていました。

出土遺物としては、刷毛目文様がある土器（擦文式土器）や鉄器



公民館に展示されている擦文式土器

（小刀、なべなど）のほか、糸によりをかける道具の紡錘車（ぼうすいしゃ）などが見つかっています。

まだはつきりしないところもありますが、これまでの研究では、この擦文文化が次の時代のアイヌ文化へとつながっていたと考えられています。

遺跡の調査にあたった富水慶一氏（当時白糠高校教諭）は、住居のかまどが東側（和天別川の方向）に作られていること、入口が川の下流方向に設けられたと考えられることから「川の上流を神聖な地と考えるアイヌの生活様式を連想させられる」と、アイヌ文化との関連を述べています。

【参考文献】○『北海道白糠町の先史文化』第二輯・第三輯・第四輯、白糠町教育委員会、1968年〜1969年



和天別河口遺跡竪穴住居跡

白糠の アイヌ語地名

第5回

○茶路（チャロ）川

茶路川は、足寄町との境付近から太平洋へと流れる、長さ（流路延長）71・4^{キロメートル}、流域面積353・7平方^{キロメートル}の本町で一番大きな川です。

「チャロ」は「くの口」という意味のアイヌ語で、茶路川が古くから十勝の内陸、さらには、網走へ通じる交通路の役割を果たしていたことから、その「入り口」ということで名がつき「川口」と訳されています。

茶路川が内陸との交通路であったことについて、白糠村時代の歌人・郷土史家小助川濱雄は、著書の『[※]釧路国蝦夷時代史』で「白糠網走間の山道は、はじめ網走川をさかのぼり、釧路、北見国境を越え陸別川に沿って下り、足寄を経て白糠郡の茶路川の上流に出で、ここより二十里の流域に沿いて白糠に出づる道なり（一部略）」として、その沿道の地名（アイヌ語



茶路川の河口

地名）も詳しく記しています。

また、茶路川が二股でわかれ左股へ向かうルークシチャロ（川）が「茶路川に沿って道が通じている」という意味のアイヌ語地名であることから道の存在を知ることがができます。

※『釧路国蝦夷時代史』は1932年（昭和7年）に小助川濱雄が著したもので、書籍として1

980年（昭和55年）に白糠町が発行しました

◆茶路川の奇談

茶路川はなかなか水の多い大川であるが、どうかすると急に水の量が減って、川口近くの中央に砂利の中州が現れる。

水流が二つに分かれ、ちょうど仰向けに両足を開いて寝た男の人のふんどしが見える格好なので、これをその地のアイヌは「ベツ・プト・チョキ・コロ」と言った。

その意味は、ベツ（川）、プト（川口）、チョキ（ふんどし）、コロ（持つ）で、「川口がふんどしをかいて（して）いる」という意味になる。これが現れるとコタン（集落）に必ず不慮の溺死者が出るというて恐れて、警戒したものである。

これは、川の中州が死者の亡霊が集まる場になるので、そのときうっかり川のほとりを通りかかった者が、運悪くそれにぶつかる、川に引き込まれるのだという。

〔矢石清太郎談、市立釧路図書館報『読書人』掲載「釧路地方の伝説」（佐藤直太郎）から引用〕

◆茶路川の風物：『ししやも祭』毎年11月、白糠橋近くの茶路川

河畔では、アイヌ伝承儀式「ししやも祭（安全操業・豊漁祈願祭）」（北海道アイヌ協会白糠支部主催）が行われます。

この儀式は、アイヌの人たちに伝わる「ししやも伝説」に由来するもので、茶路川筋にあるキナチヤウシナイのススウシナイ（柳・ある・川）がその舞台です。

伝説は、昔、食べ物がまったくとれなかったとき、コタンの人たちがススウシナイの老夫婦の家でカムイノミ（神への祈り）をしたところ、川の流れに逆らって、柳の葉といっしょに真っ黒に群がる小魚がのぼってきた。老夫婦は思わず「スス・ハム・チェプ（柳・葉・魚）」と叫び、その魚がコタンを救ったというものです。



安全操業と豊漁を祈願する『ししやも祭』が茶路川河畔で行われる

白糠の アイヌ語地名

第6回

○シリエド

「シリエド」は、現在の「石炭岬」のことで「シリ（大地の）」と「エド（鼻）」という二つの言葉から「山が海に突き出ている岬」と訳されています。

「シリエド」が「石炭岬」と呼ばれるようになったのは、幕末以降と考えられ、その名が示すとおり、この場所で石炭が掘られたことによります。



国道 38 号から見た石炭岬

◆北海道石炭採掘創始の地

1854年（安政元年）、徳川幕府は、日米和親条約を締結し下田と箱館（函館）を開港しました。箱館奉行所は、箱館の開港にともない、外国船の燃料として石炭を供給することとなり、蝦夷地内を調査し、シリエドの石炭が有望であるとの結果から、1857年（安政4年）この地に石炭採掘場（炭山）を開きました。

石炭の採掘は、幕府役人の栗原善八を責任者に、江戸から派遣された職人のほか、地元のアイヌの人たちによって行われ、後に罪人も20人ほどが使われたという記録が残っています。

そして採炭の様子については、当時の記録から、九州の炭鉱や金山・銀山と同じ方法が採用された本格的なものであったことがわか

記念碑『北海道石炭採掘創始の地』



つています。

・松浦武四郎『東蝦夷日誌』（引用）

「近頃また此上より石炭を掘出し、今盛に掘居る也。其稼方九州邊の掘方と異なる事なし。」

・成石修『東徼私筆』（引用）

「シラヌカ番屋の五六丁前に山腰石炭多し。…山腰二ヶ所に炭穴有り。…当所は穴の丈六尺も有べし、窟中の模様は金銀窟におなじ、所々にかんてらを置たり。」

採掘された石炭は、船で箱館まで輸送されましたが、途中の揺れでくずれてしまうことが多く、炭質も徐々に低下したことから、外国船からしばしば不評を買いました。また、イワナイ（岩内）に新たな炭山が発見されたことにより、シリエドの石炭採掘場は1864

年（元治元年）2月に閉山となりました。本町では、この史実をもとに、石炭岬近くの山の上に記念碑『北海道石炭採掘創始の地』を設けています。

○泊（トマリ）

現在の岬1丁目（オクネップ川から石炭岬まで）辺りは「泊（トマリ）」と呼ばれたところで、現在も町内会名（泊町内会）としてその地名が使われています。

「トマリ」も「湾、入江、港」を意味するアイヌ語地名で、全道各地にあります。この言葉は、日本語が伝わってアイヌ語になった日本伝来語と言われています。



東山公園から望む泊地区と漁港

白糠の アイヌ語地名

第7回

○サシウシ(刺牛)

「サシウシ」は「サシ(昆布)・ウシ(群生する)」という意味のアイヌ語で、昆布の産地であったことからつけられた地名です。昔は道東でも有数の生産地として、釧路町の昆布森「コンプ(昆布)・モイ(湾)」海岸と並んで有名だったと言われています。

アイヌ語では「昆布」のことを「サシ」とも「コンプ」とも言いますが、道東では主に「サシ」と呼ばれ、昆布森は特例のようです。

○サシウシチャシコツ (刺牛の砦跡)

刺牛3丁目のJR根室線北側の崖の上に「サシウシチャシ」の跡があります。弓と矢をイメージして作られた記念碑があるところから東側の部分です。

「チャシ」は「砦」と訳されますが、実際は、コタンの儀式や裁

判、会議などを行う特別な場所、英雄が住む館であったと考えられています。もちろん、非常時には砦として使われました。

また、チャシには「柵」や「柵囲い」という意味もあるとおり、その場所は柵で囲われていたことがわかっています。

サシウシチャシは、南側が高さ



サシウシチャシコツの記念碑

約60層の崖、東側は深い沢に面しており、西と北側には二重の濠と土塁が設けられていました。

チャシ内の竪穴住居跡からは、土器・石器・金属器が出土しており、続縄文時代(約2千年前)から擦文時代を経てアイヌ文化の時代(約2000年前)にまで続くものと考えられます。

◆サシウシチャシの伝説

むかし、サシウシのチャシに美しい女の首長がいた。その名をホルベチャカムイメノコと言った。あまり美しいので、カンドコロカムイ(天上の神様)が天下つたのではないかと言われたものだ。

この女の首長は、立派なシトキ(胸飾りの玉)を持っていた。それを聞いたアツケシ(厚岸)の首長が、それを奪い取ろうと、舟に部下を乗せて不意に攻め寄せてきた。

サシウシコタンのアイヌたちは、常に恐ろしい評判のアツケシの首長が来たと言っただけで、逃げ支度をするという大騒ぎになった。

しかし、女の首長は少しも騒がず、静かにチャシの中央に立って、天に向かって神の助けを乞う祈りをした途端に、たちまち旋風が巻き起こって、チャシに半ば攻め登

っていたアツケシ勢は、木の葉のように吹き飛ばされてしまった。

〔千葉ヌイフチの話、市立釧路図書館報『読書人』掲載「釧路地方の伝説」(佐藤直太郎)から引用〕

◆鹿の天下る山とサシウシ

白糠町と十勝の国境に、ウコタキヌプリ「ウコツ(互にくっついて)・キ(する)・ヌプリ(山)」という山があり、山へ獵に行くときには、必ずこの山にイナウ(木幣)をささげることになっている。ここは、ユ克蘭ヌプリ「ユク(鹿)・ラン(下りる)・ヌプリ(山)」とも言って、むかし、鹿をつかさどる神様が天から鹿を下したところであると言い、最近までよく雷鳴がして、鹿が下される音がしたという。

足寄や白糠地方に鹿が多かったのは、この山に下りた鹿が峰を伝って人間の里へ集まって来るからだと言い、白糠では、この山から峰続きになっている石炭岬やサシウシの岬に酒をあげ、鹿をさすけてもらうよう祈願したものである。〔『北海道の伝説』角川日本の伝説17、差間三平伝、角川書店から引用〕

白糠の アイヌ語地名

第8回

○チカヨップ

「チカヨップ」は、刺牛と西庶路の境にある地名で「チカ（魚のチカ）・オプト（川口）」というアイヌ語から「チカが群がっている川口」と訳されています。

チカは、道東では4月から5月が産卵期で、川水が海に流れ出る塩分の低い砂地の浅瀬で産卵します。そのようすがこの川口で見られたことから「チカヨップ」という地名がついたもので、こうした生き物の営みもアイヌ語地名の由来となっています。

アイヌ語辞典を引くと、チカは「トキカラ」と呼ぶのが一般的のようですが、方言としていくつかの呼び名があります。

アイヌ語研究に尽くされた、アイヌ民族の言語学者知里真志保博士は、著書の『分類アイヌ語辞典 植物・動物編』の中で、白糠では「チカ」と記しています。

〔出典『知里真志保著作集』別巻
I 分類アイヌ語辞典 植物・動物編〕

○オンネチカオプ川 （オンネチカップ川）

チカが群がっている川口があるのが「オンネチカオプ川」です。「チカオプ（チカヨップ）」に大きいという意味の「オンネ」がついたもので、「大きいチカオプ川」という意味です。



オンネチカップ川

「オンネ」は、小さいことを表す「ボン」と対で使われることが多く、近いところに大小2つの川があったことを示しています。古地図を見ると、オンネチカオプ川と西庶路駅の間に「ボンチカオプ川」の記載がありますが、現在ではその川を見ることはできません。

◆「アバシリ越」新道

松浦武四郎が著した『東蝦夷日誌』のチカヨップ（日誌では「チカヨフ」と記載）のところに「此處文化度開きしアバシリ越新道の入口跡あり。」という記述があります。

この新道は、幕府が蝦夷地を直接支配していたころ、白糠に詰めていた幕府役人の大塚惣次郎が、1808年（文化5年）に開削を始め、1810年（文化7年）に開通させました。

チカヨップを起点に、阿寒の舌辛を経て阿寒湖西岸をとり、釧北峠を越えて網走の新栗履（今の藻琴）に至る全長46里（約180キロ）に及ぶもので、現在の国道240号のもとになったとも言われています。

しかし、蝦夷地支配が松前藩に移った1821年（文政4年）、

藩によって通行が止められ、その後は使われることなく自然に消えてしまいました。

白糠村時代の歌人・郷土史家小助川濱雄も『釧路国蝦夷時代史』の中で新道のことに触れていて、大塚惣次郎が開削をはじめた前年の1807年（文化4年）、大塚はこの路線を調べるとともに、馬を斜里、宗谷、天塩、苫前、留萌に送り、宗谷のアイヌの人たちに大いに喜ばれたと記しています。このように、チカヨップは『白糠のアイヌ語地名』が述べているとおり「歴史的にきわめて由緒ある土地柄」なのです。



この奥に網走へ続く道があったと記されている

白糠の アイヌ語地名

第9回

○庶路（シヨロ）川

庶路川は本町で二番目に大きな川で、阿寒富士のふもとの源流から、66・8キロメートルを流れ太平洋に注いでいます。

「シヨロ」は「ソ（滝）・オロ（向かつている）・ル（道）」という意味のアイヌ語地名で、その名のとおり、河口から約30キロメートル上流には「大滝」と呼ばれる滝があります。



庶路の大滝

「大滝」は、かつて庶路川で木材の流送が行われていたとき、まわりの岩を崩して滝つぼを浅くしたこと、現在は5メートルほどの高さですが、江戸時代の後期、松浦武四郎が訪れた滝は、「此瀧幅二丈（約6メートル）、高五六丈（約15〜18メートル）も有、水勢筆に盡し難し」（『東蝦夷日誌』）と言う、まさに大滝でした。

また「シヨロ」は、むかし「シヨロロ」「ソロロ」と呼ばれていたことから、永田方正が『北海道蝦夷語地名解』で「シヨ（瀧）・リ（高き）・オロ（処）」というアイヌ語をもとに「瀑布高き処」と解いたことから、大滝は庶路川を言い表すうえで最も特徴的なものだったことがわかります。

〔永田方正／アイヌ民族教育とアイヌ語研究に尽くした明治時代の教育者。『北海道蝦夷語地名

解』（1891年刊行）は、北海道庁の命を受けて従事したアイヌ語地名調査をまとめたもので、『永田地名解』とも呼ばれています。

◆庶路上流の地獄穴（庶路川にまつわるアイヌ伝説その①）

古くから、庶路川の上流から阿寒に抜ける穴があると伝えられ、これはあの世に通じているオマンルパロ（あの世へ行く道の入口）ではないかと言われている。

むかし、二匹の犬が熊を追ったところ、熊はこの穴へ逃げ込んだので、二匹の犬も続いて中に入ってしまった。一匹は熊を追って阿寒のふもとへ抜けることができたが、もう一匹はついに出てこなかった。それで、その穴は中で二つに分かれていて、一方はあの世に通じているのではないかと言われている。

〔目下ユキ女伝／市立釧路図書館報『読書人』掲載「釧路地方の伝説」（佐藤直太郎）から引用〕

◆義経と弁慶の力石（庶路川にまつわるアイヌ伝説その②）

庶路川の上流に滝がある。その



明治通りから見る庶路川

滝の上にパンケイワ（上の岩）、滝の下にパンケイワ（下の岩）というのがある。

むかし、義経が弁慶を連れて狩りにやってきて休んだとき、常に力自慢をしている弁慶と力くらべをした。義経は、弁慶が持ち上げられなかった岩を軽々と持ち上げ、滝の上に投げ上げたが、弁慶はそれより小さい岩を落としてしまった。

義経が滝の上に投げ上げたのがパンケイワで、弁慶が落としたのがパンケイワである。

〔山本甚吉談／市立釧路図書館報『読書人』掲載「釧路地方の伝説」（佐藤直太郎）から引用〕

白糠の アイヌ語地名

第10回

○恋問（コイトイ）

「コイトイ」は、「コイ（波）・ドイエ（崩れる・壊れる）」というアイヌ語で「打ち寄せる波が砂丘を崩し（陸地を壊して）、川や沼に流れ込む」と訳されています。漢字の「恋問」のイメージとはずいぶん違った由来です。

この地名は全道各地にあり、地名辞典では標津町や新ひだか町三石、稚内市や苫小牧市が紹介されています。



国道 38 号から見たコイトイ川

いずれも「波が崩す」とか「波が越える」と言う意味で、川の下流のようすから名前がついたものです。

アイヌ語地名研究者の山田秀三は、「どこも川の下流が海岸砂丘の後を横流している処で、海波が荒い時に、その砂丘を破って川に打ち込む処から呼ばれた名である。」と説明しています。（『北海道の地名』より）

◆コイトイにまつわるアイヌ伝説

①コイトイ沼のカムイ・イワ

庶路のコイトイ沼は、ウグイ、フナなどの魚もたくさんいたし、周囲の山はウバユリやキトピロも多かったのだ。庶路は住みよい平和なコタンとしてアイヌ仲間でもうらやましがられていた。昔、コタンにたいへん上手にド

ス（占い）をするばあさんがあった。

どうしたことが、ある晩、このばあさんが急に白髪を振り乱して「オレプウンペ エク（津波が来る）」とコタンの中を連呼して走り回った。コタンの人たちは、はじめ気にもかけなかったが、ばあさんは「早く逃げないと皆死ぬぞ」とますます大声で家々の戸をたたいてまわったので、みんな気が悪くなり裏山に逃れた。

すると間もなく沖の方が盛り上がり、あれよあれよといううちに山のような大波が押し寄せてきて、すべてをさらっていった。

人々は「ばあさんのおかげで助かった」と喜び合った。しかし、ばあさんの姿はそれっきり見たものがなかった。

後でわかったのだが、沼の奥の谷にひとつの大岩が立っていた。これは、あのドスばあさんがなったのに違いなく、イナウ（木幣）をあけて、カムイ・イワ（神岩）と言って祭った。

②コイトイ沼の主

昔、コイトイ沼は無名で、ただ「トー（沼）」と言っていた。この沼は不思議なことに、いろいろな種類の魚がたくさんいても、



コイトイ沼周辺の様子

フナがすんでいないのである。

昔、チライ（イトウ）の子が、コイトイ川をさかのぼって、しまいに沼に入ってしまったからさあたへん。この沼はフナがたくさんいて、チライの子はさんざん痛めつけられて、半死半生になって、流れて海にもどった。

これを見た親チライは憤慨して、仲間をおおげい連れて行ってフナを皆殺しにしてしまった。そして親チライはとどまって主になった。それでフナは今もすめないのだと言う。

（2 題の伝説とも、庶路神の沢芦名ヨシ談／市立釧路図書館報『読書人』掲載「釧路地方の伝説」（佐藤直太郎）から引用）